

【補註 12】 Bhārukaccha (パールカッチャ)

[0] パールカッチャには積尊の事績として特記しなければならないようなものはないが、仏弟子に関する記述が A 文献資料に一箇所ある。それはパールカッチャ出身の仏弟子が不浄法を犯して還俗しようと帰国する途上で、ウパーリがその仏弟子の行為を「不犯である」と判定したという記事である⁽¹⁾。そのほか B 文献資料では、ヴァッダマター比丘尼やヴァッダ比丘の誕生地⁽²⁾、あるいは淫戒に関する記述の舞台⁽³⁾として取り上げられている。

- (1) *Vinaya Pārājika 001* (vol.III p.039)
 (2) *Thera-g.-A.* (vol.II p.141)、*Therī-g.-A.* (p.171)
 (3) 『四分律』(大正 22 p.975 中)

[1] まずパールカッチャ (Bhārukaccha) の漢訳名を紹介する。

[1-1] 漢訳の A 文献資料には以下のものがある。

婆樓越奢：『四分律』(大正 22 p.975 中)

[1-2] また漢訳の B 文献資料には次のものがある。

- 婆樓割車国：僧伽婆羅譯『孔雀王呪經』卷上 (大正 19 p.450 中)
 跋盧羯車国：義淨譯『仏説大孔雀呪王經』卷中 (大正 19 p.464 下)
 婆盧羯泚国：不空譯『仏母大孔雀明王經』卷中 (大正 19 p.423 中)
 婆菟迦車迦：僧伽跋陀羅譯『善見律毘婆沙』卷 8 (大正 24 p.726 下)
 婆菟迦車迦：『翻梵語』(大正 54 p.998 中)⁽¹⁾
 婆樓越奢：『翻梵語』(大正 54 p.1038 下)⁽²⁾
 跋祿羯帖婆国：『大唐西域記』卷 11 (大正 51 p.935 中)
 (1) 「婆菟迦車迦(応云婆帝葛車賊 訳曰婆帝者重也葛車賊者亀)」とある。
 (2) 「婆樓越奢(応云樓割車波 訳曰重亀)」とある。

[2] 次にパールカッチャという地名がどのような規模であるかを検討する。

[2-1] A 文献資料とするパーリ資料 *Vinaya Pārājika 001* (vol.III p.039) には「パールカッチャの比丘が… (Bhārukacchako bhikkhu…)」とあり、単にパールカッチャを出身地とする比丘の意として用いられるのみで、そこには *nagara* とか *nigama* とか *gāma* といった規模を示す属性はなく、したがってその規模を示す属性は不明である。ただし漢訳の A 文献資料のなかには『四分律』卷 55 に「爾時冇城。名婆樓越奢。王字海」(大正 22 p.975 中)とあって、「婆樓越奢 (Bhārukaccha)」の規模を示す属性を「城」としているが、この文献箇所(「調部」)はわれわれの資料水準では B 文献資料に属するものとして扱っているので、A 文献資料に関しては漢・パいづれも不明であるといわざるを得ない。

[2-2] B 文献資料の *Samanatapāsādikā* (vol.I p.283) と、その漢訳『善見律毘婆沙』卷 8 (大正 24 p.726 下) では「婆菟迦車迦比丘」とあって、上記のパーリ A 文献資料と同じく、婆菟迦車迦を出身とする比丘とのみある。あるいは *Milinda-pañha* (『ミリングダ王の問い』) でも 'Bhārukacchakā (パールカッチャ人)' (p.331) と名を出すものの、その規模を示す属性に関しては不明である。また *Ma-hānidessa* (『大義釈』) にも単に 'Bhārukaccha (パールカッチャ)' (vol.I p.155) とあるも、その規模を示す属性については不明である。

ところが *Jātaka 463 Suppāraka-j.* (vol.IV p.137) では「バル国にてバル王が統治していた。[そこには] バルカッチャカという港町があった (Bharuraṭṭhe Bharu-rājā nāma rajjam kāresi, Bharukacchaka nāma paṭṭanagāmo ahoṣi)」とあり、バルカッチャはバル国 (Bharu-raṭṭha) という領国内にある「港町 (paṭṭanagāma)」として登場してくる。

ところで同じ南伝のアッタカター、すなわち *Thera-g.* vs.335~339 にはこの土地の出身者であるヴァッダ長老の偈を収めてあるが、その注釈書 *Thera-g.-A.* では「パールカッチャ都城 (Bhārukacchaka-nagara)」(vol.I p.211) とあり⁽¹⁾、彼の生れ故郷パールカッチャは「都城 (nagara)」であったとする。これは上記 [2-1] で紹介した『四分律』の「婆樓越奢 (Bhārukaccha)」が「城」とあるという記述に符合している。恐らく 'Bhārukaccha paṭṭanagāma' と 'Bhāru-kacchaka-nagara' と「婆樓越奢城」とは同じ地名を指すものと考えられるので、その間に規模の推移を想定せしめるものがあるかもしれないが、これらは同一の地名の呼び名の違いと見て大過なかろうと思われる。つまり後にも述べるように、パールカッチャ (バルカッチャカ) は外国と交易が行われていた国際的な港町であり、都市でもあったということである。

- (1) *Therī-g.* vs.204~212 のヴァッダマター (ヴァッダ長老の母) 尼偈の注釈書にも「都城 (nagara)」(*Therī-g.-A.* p.171) とある。

[2-3] 一方、北伝の『孔雀王呪經』卷上 (大正 19 p.450 中) には「婆樓割車国」、『仏説大孔雀呪王經』卷中 (大正 19 p.464 下) には「跋盧羯車国」、『仏母大孔雀明王經』卷中 (大正 19 p.423 中) には「婆盧羯泚国」とあり、いずれも「国」としているが、これは城とその周辺地域を含めた都市の意と解してよいであろう。

[2-4] ところでこの国の具体的な規模については、B 文献資料の『大唐西域記』卷 11 (大正 51 p.935 中) に「跋祿羯帖婆国。周二千四五百里。国大都城周二十餘里」とあって、この国の規模は周囲 2 千 4、5 百里にわたり、その都市の規模は周囲 20 余里ある、とされる。

これと同じ規模の国を『大唐西域記』の中で見いだすと、同卷 11 に「阿傘荼国。周二千四五百里。国大都城。周二

十餘里」(大正 51 p.938 中)とか、同巻 5 に「阿耶穆佉国。周二千四百里。国大都城。臨殞伽河。周二十餘里」(大正 51 p.897 上)、同巻 10 に「珠利耶国。周二千四百里。国大都城。周二十餘里」(大正 51 p.931 中)とあるように、西印度の阿耆荼国(Avanḍa)、中印度の阿耶穆佉国(Ayamukha, Hayamukha, Ayomukha)、南印度の珠利耶国(Colya, Coḍa, Coḷa, Cola, Choḷa)に相当する規模の国であったと考えられる。

しかもこの都市の規模は、玄奘が訪れた当時の磔迦国(Ṭakka)の「奢羯羅故城(Sāgala-nagara)」⁽¹⁾、あるいは「秣菟羅国(Mathurā)」⁽²⁾、「劫比他国(Kapi-tthikā, Kapitthaka. 旧名の僧迦舍[Sānkassa])」⁽³⁾、「阿踰陀国(Ayōjjhā, Ayo-dhyā)」⁽⁴⁾などの都市に匹敵する規模であったと思われる。

さらに同巻 6 には「室羅伐悉底国。周六千餘里。……宮城故基周二十餘里」(大正 51 p.899 上)とある記述から推して、現在、他の遺跡調査に比べてより判明している舍衛城の宮城の建物の跡ほどの規模であったと推定される。

(1) 「垣堵雖壞基趾尚固。周二十餘里。其中更築小城。周六七里」(大正 51 p.888 中)

(2) 「国大都城周二十餘里」(大正 51 p.890 上)

(3) 「国大都城周二十餘里」(大正 51 p.893 上)

(4) 「国大都城周二十餘里」(大正 51 p.896 中)

[3] パールカッチャの地理的位置は次のようになる。

[3-1] これも A 文献資料には関説されず、B 文献資料として上記の『大唐西域記』巻 11 にある「跋祿羯帖婆国」(大正 51 p.935 中)がパールカッチャあるいはバルカッチャに比定されていて、この国はインド亜大陸の西南に位置し、現在のナルマダー河口に位置する港市 Bharoach, Broach とされている⁽¹⁾。

(1) 水谷真成訳註・玄奘『大唐西域記 3』(東洋文庫 657, 1999) p.307 の註(1)参照。

[3-2] ところでこの地の歴史的な記述としては、*Dīpavaṃsa* (IX. 26-28) に「ヴィジャヤ(Vijaya 王)がパールカッチャで 3 ヶ月間滞在して、船で航海してセイロン島(Lankādīpa)に至った」(要約)とする伝承があることから、この港町がアラビア海を渡航するための重要な基地であり、海路の要所であったことを伺わせている。

[3-3] さらに陸路に目を転ずれば、東へ向えばアヴァンティ(Avanti)の首都ウッジェーニー(Ujjeni)へと続き、さらに進んでヴァンサ(Vaṃsa)の首都コーサンビー(Kosambi)へと向うルートの要所でもあり、南下すればバーヒヤ(Bāhiya)比丘が住んでいたスーパーラカ(Suppāraka)へと向うルートの要所でもあったと思われる。

[4] 次にパールカッチャの経済的・政治的関係についてみよう。

[4-1] 『大唐西域記』巻 11 (大正 51 p.935 中)「土地鹹鹵草木稀疏。煮海為鹽利海為業」とあり、土地に塩分を含んでいるところから農耕には適さなかったようであるが、一方で海岸に面した港町ということで、海水を汲んで煮詰めるという方法による製塩が重要な産業であったことを伝えている。

[4-2] また B 文献資料の *Jātaka 360 Susondi-j.* (vol. III p.188) には「パールカッチャの商人たちが船でスヴァーナ国へ向けて航海に出る(Bharukaccha-vāṇijā nā- vāya Suvāṇṇabhūmim gacchanti)」とあったり、ギリシア文献にも‘Barygaza’の名で登場することから、西方諸国との交易港として有名であったとされる⁽¹⁾。

(1) 水谷真成訳註・玄奘『大唐西域記 3』p.307 の註(1)参照。